

吉田賢抗著「論語、第499章」新釈漢文大系、明治書院1960年5月25日刊を読む

「子曰く、命めいを知らざれば、以て君子くんしたること無なきなり。禮れいを知らざれば、以て立つこと無なきなり。言げんを知らざれば、以て人ひとを知ること無なきなり。」

通釈

孔子言う、君子の君子たるゆえんは、知命・知礼・知言の三つに存する。

1. (1)天の偉大な力が、万物を創造し、それにそうあるべき道理を与えたのが天命である。
 (2)人は天命を知ることによって、自分が天から稟けたものを行い尽くし、自分ではいかんとも出来ない窮達の命に対しては、信じ安んずる心がまえができる。
 (3)このようにまず人事を尽くしても逆境に在った場合は、天をとがめず、人を怨まず、道を行うことを楽しんで安んずることができなくて、どうして君子といえようや。
2. (1)礼は実に人類文化の象徴である。
 (2)礼を知らないと、進退の宜しきは得られず、品位は保てず、立派な文化人としての行動が確立しない。
 (3)どうして君子ということができようや。
3. (1)言は人の心の声である。
 (2)知識が磨かれ、正しい判断力があって、人の言の正邪善悪を弁じて迷わないようではなくては、どうして、よく人を知って正しく対処することのできる君子といえようや。

○この知命・知礼・知言の三つは、上は天に通じ、内は己を成し、外は人に応ずる君子の要訣である。

語釈

○知命

- (1)天命を知って、これに安んずること。
- (2)天の命ずるものは、少なくとも、人の稟けた本性、この世に生をうけた意義・使命、自分の力では何ともできない運命というような三つの意味がある。
- (3)天命を使命、または運命と訳しては狭くて俗っぽい。使命も運命も含んで、孔子がしばしば言及した「天」に通じるところの天命というべきである。
- (4)孔子は五十歳で天命を知ったといい、孟子は、その心を尽くす者はその性を知り、その性を知れば天を知る(尽心上)と言った。
- (5)孔子と孟子の学説としては、極めて重要な問題である。

○君子

- (1)智と徳の完成した人物。
- (2)孔子の理想とした人間像の名である。

○知礼

礼を知ってこれを守り、その坐作・進退を礼にかなうようにするのみでなく、大きく社会・国家の

礼法を遵守すること。

○立

- (1) 確立。
- (2) 自主的に立つこと。
- (3) 他の力を借りないで、自主独往できるの「不知礼、無以立也」を参照。

○知言

- (1) 人の言を聞いて、その言が、どういう心から出たか、どういう意味かを知る。
- (2) 人の言の善悪、正邪と、その言った人の真意まで知ること。

余説

1. 知命・知礼・知言を以て論語の全章を結んだのは意味がある。
2. 「知」は孔子の好学を意味し、知命は首章(第1章)の「人知らずして慍(いきどお)らず、亦た君子ならずや」にも応ずる。
3. (1) 「礼」は孔子の学問の対象であり、社会の秩序であり、国家の法制であり、人倫の規範であって、仁徳の外部に表現されたものである。
(2) 実に人類文化の象徴である。いかに物質文明が進歩しても、
(3) 礼のない社会は文化社会とはいえない。中国の思想文化は、礼の消長の歴史ともいえる。
4. (1) 尹焯が、「この三者を知れば君子の事は備わる。孔子の弟子らが、これを記して終篇としたのは、意味の有ったことだろう」と言う如く、編者の用意をうかがうに足る最後の一章である。
(2) いろいろの問題を残しながらも、学而篇の第一章と、この終章は、君子の学の始終を述べたものとして相対応し、論語全篇を締めくくっている。
(3) 漢代において、三論をまとめて一論語に集成した諸学者の深慮が深くここに存するものと見るべきだろう。

P438 ~ 439

<コメント>

孔子の教えを弟子たちが 499 の章にまとめた「論語」の最終章。「天命」を知ること、「礼」を知ること、「言」を知ること。

- (1) 「使命(ミッション)」を自覚し、「自覚をもって学ぶ」
- (2) 「礼儀」正しく「美しい立居振舞い」を心掛け、
- (3) 「美しいことば遣い」(敬語表現を含む言葉遣い)、「元気なあいさつ、あいさつはこちらからする」を目指す
これは、すべて「論語」の教えといえます。

2023年3月20日(金)林明夫